

山村暮鳥略年譜

和暦	西暦	年令	主な出来事	作品
明治17	1884	0	1月10日、群馬県西群馬郡棟高村（現・高崎市）に父・小暮久七、母・志村シヤウの長男として生まれる。実父が未入籍のため祖父の二男の「志村八九十（はっくじゅう）」として届けられた。	
明治22	1889	5	父が祖父との不和により千葉県佐原に出奔、母も後を追って家を出る。暮鳥は前橋在住の伯父に引き取られた。 5月1日、実父の養子として入籍され「小暮八九十」となる。	
明治23	1890	6	元総社尋常小学校に入学。	
明治24	1891	7	祖父が亡くなったため、父母とともに志村家に帰る。 10月22日、堤ヶ丘尋常小学校2年に転入学。	
明治27	1894	10	4月、国布村引間花園高等小学校に進学。	
明治28	1895	11	父が繭の取引に失敗し、家が没落したため、花園高等小学校を中退。両親とともに上郊村生原に移る。 4月、両親の移住先・千葉県佐倉に単身で向かう。また、この年、父母の元を去り、その後各所を放浪してさまざまな仕事に就く。	
明治31	1898	14	腸を病み、当時上郊村に帰農していた父母の元へ帰る。	
明治32	1899	15	10月1日、年齢を偽り堤ヶ丘小学校代用教員となる。	
明治34	1901	17	1月、前橋正マッテア教会の英語夜学校に毎夜通学。 2月、堤ヶ丘小学校準訓導となる。日本聖公会高崎講義所の日曜学校で、宣教師ミス・ウォールにも英会話を学ぶ。	
明治35	1902	18	5月6日、堤ヶ丘小学校に退職願を提出。	
			6月6日、聖マッテア教会長老ゼームス・チャベルにより受洗。	

			8月下旬、宣教師ミス・ウォールの転任で、青森聖アンデレ教会に赴く。	
明治36	1903	19	4月、国布村引間花園高等小学校に進学。宣教師ミス・ウォールの尽力で東京佃島の聖マッテア伝道学校に入学。その後東京の聖三一神学校に編入学。	
明治37	1904	20	雑誌「白百合」に「小暮流星」の筆名で短歌を発表。	
明治38	1905	21	3月、戦争補充兵として召集。 4月、北海道旭川二十六連隊に入隊。7月下旬から翌2月中旬まで満州へ。戦地からも短歌を送る。	
明治39	1906	22	2月、満州より帰国。 4月、聖三一神学校に復学。同級生に須貝止がいた。	
明治40	1907	23	『築地の園』『文章世界』に詩を発表。この頃短歌から詩へ移る。	6月 雑誌『南北』創刊
明治41	1908	24	6月、聖三一神学校を卒業。 8月、秋田聖救主教会に伝道師として赴く。 10月、秋田横手町横手講義所に転任。	
明治42	1909	25	2月、秋田湯沢町湯沢講義所に転任。 12月、日本聖公会仙台基督教会に転任。	6月 雑誌『北斗』創刊。第2号より編集者となる。このころ「小暮馬村」の筆名を用いる。
明治43	1910	26	1月、自由詩同人となり、「山村暮鳥」の名で『自然と印象』に作品を発表。 10月、上級聖職者と衝突し、日本聖公会仙台基督教会に休職願を出し上京。 11月、東京（当時は神田）諸聖徒教会（英国国教会）に転籍。	8月 詩集『LA BONNE CHANSON』刊行 9月 パンフレット詩集『夏の歌』刊行
明治44	1911	27	6月、水戸聖公会（水戸聖ステパノ教会）に転任。 11月、常陸太田講義所に転任。	
大正元	1912	28	4月、一時上京。 9月、日本聖公会平講義所に転任。	

大正 2	1913	29	6月17日、教父・土田三秀の長女・富士と結婚し、土田家の養嗣子となる。 9月、平準教会へ転任。 10月、第三回修養会で大洗へ。須貝止（昭和20年治安維持法で留置されるも、戦後復活）と再会する。	5月 詩集『三人の処女』
大正 3	1914	30	6月、萩原朔太郎、室生犀星と「人形詩社」を設立。 6月18日、長女・玲子誕生。	5月 雑誌『風景』創刊
大正 4	1915	31	8月、牛久の小川芋銭を初めて訪問。 11月9日、長男・聖一郎が誕生するが、12日に死亡。	3月 人形詩社より詩集『卓上噴水』創刊 6月 雑誌『群集へ』創刊 12月 人形詩社より「聖山稜玻璃」を創刊
大正 5	1916	32		4月 雑誌『LE PRISM』創刊 10月 雑誌『感情』に参加
大正 6	1917	33	11月、高崎聖公会への転任内定。 12月、高崎聖公会転任から水戸聖ステパノ教会転任に変更。	9月 随筆集『小さな穀倉より』刊行
大正 7	1918	34	1月、水戸聖ステパノ教会に転任。 1月6日、木星記念大会に出席し横瀬夜雨、野口雨情、大関五郎、柳橋好雄らと会う。同月大関・柳橋らと黎明会を結成する。 4月、大洗を一家で散策する。 4月14日、「黎明会」例会。 9月2日、次女・千草誕生。 9月28日、大喀血をして、病床に伏す。 12月、静養のため千葉県北条町（現・館山市）に移る。	9月 『ドストエフスキー書簡集』（翻訳） 10月 雑誌『苦惱者』創刊 11月 詩集『風は草木にささやいた』刊行
大正 8	1919	35	5月、北条町を引き上げ上京。妻子を東京築地の土田三秀の家に頼み、本井商羊の招きで京都、大坂、奈良に遊ぶ。	

			<p>6月、大洗海岸の小林楼に滞在。日本聖公会伝道師休職。</p> <p>7月、大貫（現・大洗町大貫町）の前原山に移り、東京から妻子を呼ぶ。</p> <p>12月19日、教会より来年6月以降は解雇とする旨の通知を受ける。</p>	
大正9	1920	36	<p>1月16日、北好間の菊茸山（吉野義也の力で新築された家）に移住するも住民の反対にあい23日下山。27日、大洗町磯浜明神町の鬼坊裏別荘に移る。</p> <p>5月、「鉄の靴会」を発足。</p> <p>6月、日本聖公会からの俸給止まる。</p>	8月 童謡集『ちるちる・みちる』刊行
大正10	1921	37	<p>9月、妻・富士、死児分娩。</p> <p>11月、小説『影』を新聞『いばらき』に連載。この時期、小説に数多く執筆している。</p>	<p>5月 詩集『梢の巣にて』刊行</p> <p>7月 詩選集『穀粒』刊行</p>
大正11	1922	38	<p>6月23日、小説『春』を脱稿。</p> <p>12月、水戸の郷土芸術社の雑誌『郷土』の監修者となる。</p>	<p>3月 小説『十字架』刊行</p> <p>5月 童謡童話集『万物の世界』刊行</p> <p>11月 モーゼ伝『葦舟の児』刊行</p> <p>12月 童話『少年行』『お菓子の城』刊行</p>
大正12	1923	39	<p>5月1日、新聞「いばらき」に小説『春』を連載（9月10日まで）。</p> <p>5月13日、大洗ホテルでの俳句大会に出席。</p> <p>7月下旬、小説『鼯鼠のうた』を脱稿。</p> <p>9月1日、文芸雑誌『星のひかり』が山村暮鳥詩集を出す。</p>	1月 童話『鐵の靴』刊行
大正13	1924	40	<p>1月15日、平の同人誌『みみづく』に「友らをおもふ」のタイトルで「おうい、雲よ…」の詩を発表。</p> <p>7月、『雲』の出版準備にかかる。</p> <p>11月、『雲』の校正を病床で続ける。</p>	<p>8月 詩集『風に草木はささやいた』改版</p> <p>9月 評伝『ドストエフスキー』（翻訳）</p> <p>10月 伝記『聖フランシス』刊行</p>

		12月8日、暮鳥死去。肺結核の悪化と腸結核の併発による。9日、火葬。11日、聖ステパノ教会で告別式。水戸・江林廃寺（現在は祇園寺が管理）に『雲』の仮製本とともに埋葬される。	
大正14	1925	12月2日、茨城文芸社主催暮鳥一周年追悼会開催。 8月、室生犀星、萩原朔太郎が東京田端の真言宗大龍寺で暮鳥忌を営む。	1月25日 詩集『雲』刊行 4月 童話集『地獄の門』刊行 5月 童話集『小さな世界』刊行 7月 童謡集『よしきり』刊行
大正15	1926	3月、室生犀星、萩原朔太郎、小川芋銭、大関五郎、柳橋好雄らの発起で暮鳥詩碑建設が決定。	7月 詩集『月夜の牡丹』
昭和2	1927	5月1日、大洗子の日ヶ原にて、「ある詩」の詩碑除幕。昭和28年（1953）、現地に移設。	3月 『暮鳥詩集』刊行
昭和4	1929		詩集『土の精神』刊行
昭和8	1933	4月、小川芋銭の肝煎りで第1回暮鳥会開催。	